

アダム・スミスの觀たる貨幣理論

アダム・スミスの國富論一たび出で、其以前の經濟學者の努力はみな光を失ひたりとなすことあらば、予は暫くその論斷を遮りて、少くとも然らざる部門の存することを主張せざるを得ない。寔にその書の出現は儼として抽ずる標石を立て、經濟學の發展に新なる發足地を與へて、スミスをして近世經濟學建設者としての榮譽を擅にするに至らしめた。而かも尙ほ其説く所は謂ゆる古典學派の骨肉となりて、永く權威を後人の上に有つた。然ながら貨幣學説に關してはその透徹さと該博さとに於て、當時までに現れたる諸説に較べて必ずしも多く啓發するゝ所ありと斷じ難い。特にスミスの後數年ならずして、英國を初め歐洲諸國の貨幣現象には眼まぐるしい混亂が起り、英國に於ては一七九七年兌換停止を行ひ繼續すること廿餘年、其後一八四四年銀行法の改正を見る迄學説論策特に多く現れて貨幣學説は著しい彫琢を受けた。之等の間にありてスミスの學説は導く星の役目をなしたりとは考へられない。今之等の發展を辿りてスミスの學説との關係を釋ね、また後の批判に如何に取扱はれしかを追究することは、同時に英國及歐洲貨幣學説史の極めて重要なる部分を尋ぬる所以となるであらう。斯の如

き形に於てスミスの貨幣學説を取扱ひ、學說史上に占むるスミスの地位を明にすることは、茲に企つべく過大の仕事である。予はこの小論文に於ては、スミスの所説そのものを紹介批判することを直接の眼目となした。故に此の小論文を以てして、學說史の連鎖の上に於けるスミスの重要を闡明し得たりとは信じない。たゞスミスの所説そのもの、面目を誤なく傳え得むことを念じてをる。内容は便宜上節を分けて次の如くした。

- 一 交換經濟と貨幣の起源
- 二 交換價値の理論と價格の理論
- 三 貨幣の職能
- 四 貨幣の價値に關する二三の問題
- 五 貨幣代用物としての紙幣
- 六 貨幣の本質に就て

スミスの貨幣學説を窺ふべきものとしては、*Wealth of Nations* 第一編第四章乃至第七章、第十一章第三部、第二編第二章及び第四編第一章と、グラスゴウ大學に於ける講義 *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms*, Ed. by E. Cannan 第二部第二小部第七節乃至第十一節がある。前者に就ては、引用する所の頁數は一九二〇年發行キヤナン校訂本第二版に據るものである。

貨幣に關するスミスの考察は、その起源の問題から入つて行く。

人類自然の性向に基きて交換が起り、其結果分業が生ずる。一たび分業の制度確立せらるゝ時は、人々は其欲望の大部分を、自らの産物の過剰の部分と、他人の産物の過剰の部分とを交換して充足する。斯くして各人は交換に依りて生活し、社會は所謂交換社會となる。然ながら交換の作用は初め著しく阻害せられた、蓋し各人の欲する物と與へんとする物と、一致適合を見ること困難なるが故である。斯の不便を避けんが爲めには、何人も總ての人々がその産物と交換することを拒まざる如き、或る種の貨物の或る分量を常に所有せんと力める。此目的の爲に種々なる貨物が、種々なる國、又は民族により用ゐられ、結局金屬特に金銀が最も適當したものと用ゐられ、一般的となるに至つたと叙べてをる。(國富論第一卷二四―五頁)

スミスが分業を以て人間の睿智の結果ではなく、人性に宿る或性向の、即ち一物と他物を交換せんとする性向の必然的結果であるとしたことは、誠に興深きを覺ゆる所である。然ながら果して斯のやうな交換に對する性向と云ふが如き、特殊の心的素質が存在するものなりや否や、甚だ論證し難きのみならず、之を人性の一部に歸せしめんとするは、其の第一原因に溯るの中途に立停るものである。スミス自らも此性向が人性の根本本源の一であるか否か、之が一層事實らしく見ゆる如く、理智及び言語の能力の必然の結果であるか否かに就ては疑を懷い

てをる。人は交換の性向を有つ前に、彼自ら欲せざる或物を有ち、又他に彼の欲せざる或物の存在することを感ぜなければならぬ。彼の勞働は欲する物を過剰に得せしめ、其に従事する間は等しく必要とする他の物を得るの機會を有たしめざるのみならず、人の能力は一樣でない。之等の原因は相集つて、人々をして或物を過剰に他の物を不足せしめ、交換の必要を生ぜしめる。

貨幣を以て、斯の如き物々交換の不便を自覺するに出づる計畫的產物なりとするの説は單にミスに初らず、その先人あり後の人また其説を取りて通説の如くなり、今日尙ほ其説を奉ずるもの尠くない。然れど斯かる見解に對しては、予は二三の點より疑義を狹まざるを得ざるものである。

貨物の流通は先づ双方向的移轉たる交換より發生せずして、掠奪、貢獻、贈與等の如き平和的又は争鬭的なる一方的移轉より起れりとする説がある。貨物の一方的移轉と双方向的移轉と、孰れが先行するものなるやは斷定し得ざると共に、平和的となると争鬭的となるとは孰れが先立つものなるかを斷言し難い。今日まで知り得たる歴史上、人種學上の事實が、種々なる流通形式の存在を示せることは、偶々以て貨物の移轉に種々なる起源の存することを示すものでなければならぬ。之は種族や個人の接觸する各種の事情、條件に由りて異なる性質のものである。貨幣は物々交換の不便に基きて案出せられたりとするは、交換を以て先づ一方的移轉に先行するものとの見解を豫想するか、乃至は貨幣は一方的移轉に隨伴しては生ぜずして、交換に伴つて初めて起ることを豫想するものである。加之、上叙の見解は當然當時の未開状態に於ても、明かに物々交換の不便を感知し、交換手段を考案して其

の不便を除くべしとする考の存在したることを想定するものたらねばならぬ。然ながら之は未開の人類を推測するに、現代人の心を以てするものである。予を以て見れば、貨幣は未開の社會に於て計畫的に作出せられしものにあらずして、一般貨物の中より最も尊重せらるゝものゝ價值が、人、時、處の關係に於て、次第に一般的となり自然に貨物より分岐して成生したるものである。(此點に就ては商學研究第二卷第一號摺稿貨幣の成生と其形態の變遷を参照せられたい。)

種々なる貨物の中、特に金銀が貨幣として用ゐらるゝに至れる理由を説明して、保存に費用を要せざること、損傷せざること、分割加合の容易なることをスミスは擧げてをる。(國富論第一卷二五―六頁)此種の見解も夙に諸學者の抱懷する所であつて、スミスは其れを繼承せるに過ぎず、否スミスが貨幣學說に就て多く據所とせる如く窺はるゝハリスの著書に於ては、一層詳しく之れを論じて、永く尊重せらるゝこと、分量過多ならず過廉過大ならざること、偶然に生ぜず無償に見出されざること、使用によりて消耗せざること、保存に費用を要せざること等の外に、均一に分割しまた加合し得ること、耐久性を有すること、形狀を變じ又種々の記號を付し得ること、貨幣より種々の器具に又器具より貨幣に轉換自由なることを擧げてをる。(J. Harris, An Essay upon Money and Coins, Pt. I, pp. 35-7) クニース、ゼヴォンス以降通説となり來れる所も、所詮は同一の軌を逸しなす。

初め之等の金屬は、棒形のまゝにて貨幣として用ひられたるが、其れには二つの著しい不便が伴つた。一は秤量の手數であつて、二は鑑識の面倒である。之等の不便を避けてその流通を圓滑ならしむる爲めに、先づ純分の

正確を保證するがために權威ある人々によりて刻印が施さるゝに至り、其度毎に秤量するの手續を除くために一定の形狀に鑄造する方法が考へられ、斯くして今日の文明諸國に見る如き貨幣は成立したと説く。(同書二六―九頁)以上貨幣の起源及び使用に關する説明は、スミスの體系に於ては分業論に續くものであつて、また價值論及び價格論に進む連鎖を形作る。蓋し交換經濟の社會に於ては、各種貨物の價值を比較し測定するの必要を生ずる。そは本來労働によりて爲さるべきものなれども、労働を以てしては種々の不便困難あり、貨幣を以て一般には差支なき程度に正確に測られ、從て貨幣は交換の媒介手段たると同時に、價值の測定手段なりと考えられる。

予は茲にスミスの價值論及び價格論に論及するの至當なるを惟ふものなるが、スミスに於て價值として論ぜられたるものは、交換價值に限られて使用價值に涉らない。彼によりて考えられたる交換價值は、交換に於て他の貨物を支配し他の貨物を購ふ力であり、使用價值は其物の齎す物理的全部效用である。孰れも客觀的に見られたるものなるに於ては一致する。奧太利學派以降、價值の主觀性を力説する人々によりて解せられたる如き、貨物の使用が齎す主觀的效用の如き、或は又貨物と交換に得らるべき他の貨物の上に置く主觀的效用に由りて、其の貨物の交換價值を考ふるが如きは、彼の豫想せざる所である。若夫れスミスの價值學說批判に當りて、この事實を看過することあらば著しい妄斷に墮する。

價值及び價格の理論として、國富論に於てスミスの取扱ふところは次の三箇の問題である。

一、交換價値の眞實の測度たるものは何なるか、若く凡ての貨物の眞實の價値は何より成るか。

二、眞實價格を構成する要素は如何。

三、眞實價格と市場價格とを相違せしむる事情は何であるか。

其の内第一は、土地の所有なく資本の蓄積なく、勞働によりてのみ富の生産せらるゝ場合を想定し、之を思索の上に築き上げたる問題として、理論の上より推進めたるものである。而して第二と第三とは、單なる思索の上の問題としてではなく、我等の經驗する實際市場に現はるゝ事象として、之を取扱つたものである。

スミスの價値説が所謂勞働價値説の先頭に置かるゝことは更めて説くべく餘りに明かである。然しながら價値が勞働に起源するとなすは如何なる意味に於てなるか、換言すれば勞働と價値とが如何なる關係に立たしめらるゝかに就ては、その所説必ずしも明確なりとは云ひ難い。勞働なる語は二つの意味を有ち得る。一は生産力であつて他は生産過程に於て人の耐え忍ぶ犠牲、不快、不效用である。即ち前者は積極的客觀的の意味に於てであり、後者は消極的主觀的の意味に於てである。スミスは之をこの兩様の意味に混用してをる。價値と價格との間に截然たる區別を施さざること、甚だ多く其例を見出す所なるが、スミスに於ても亦その例に洩れない。特に又有ゆる事物の眞實の價格、換言すれば其を得んと欲する者に眞實に費用する所は、其を得るの勞苦であるとなすこと、更に其れに次で直ちに、有ゆる事物が其を得たる者、又他物と交換に其を手放さんと欲する者に、眞實に値

するものは、彼自ら省き得るまた他人に課し得る勞苦であるとなし又は、貨物を所有しまた其を或新なる生産物と交換せんと欲する者に對する貨物の價值は、其が彼等に購ひ若くは支配するを得せしむる勞働の量と、正確に相等しいとなすこと等の間には相違がある、(同書三二—三頁)

蓋し前者の言現しに於て問題となることは、自らに費用する勞働 *costing labour* であり、後者に於ては其が支配する勞働 *commanding labour* である。此二つが後の勞働價值學說の上に別箇の役目を有たせ、リカードオが進歩せる社會の事情に適用し得るものとして、前者を取りて、後者を排したるに對して、マルサスは後者を辯護して前者を排した。それ故に其意味を明にしたることに於て、勞働費用説はリカードオに發すると云ふを適當とする。斯かる相違は、有ゆる勞働は結局自由に比較し得べき數量に引戻すことを得べし、とするスミスにとりては問題となり得ないと見らるゝであらう。然ながら兩者の間には、同一の基準に引戻し難い隔りがある。前者は價值の出來上る道行きを見たるものであり、後者は價值が働く相を促へたものなるの相違がある。

スミスの想定したる如く、種々なる勞働は比較し得るや否や、勞働の量は果してその如く測定し得るや否や。スミスも勞働の異なる量の間の割合を確むるの困難は認めてをる。二種の作業に費さるゝ時間のみが常に此の割合を決定するものではない。耐忍ばれたる困難、用ゐられたる巧妙さの度合の相違も、同様に考量に入れられねばならぬ。二時間の容易なる仕事に於けるよりも、一時間の困難なる仕事に於ける方に、より多く勞働が存するであらう。習得するに十年の勞働を要する仕事に用ゐたる一時間の勞働には、普通の仕事の一ヶ月間に於けるより

も多くの労働がある。(同書三三頁)と説いてゐることは即ち其れである。誠に困難若くは巧妙さの何れに就ても、時間に於けると同じやうな正確なる測度を見出すことは不可能であるが、若し之を可能としても、其れは人間を生れながらには平等なりと觀る假定の上に立たせねばならぬ。先天的に有すべき仕事に對する能力、労働習得の能力等に於ける差異ありとせば、それは如何になるべきか。然ればスミスも之等の困難を認めて、具體的に異なる種類の労働が交換せられる割合は、正確なる測度によりてではなく市場に於ける折衝によりて、正確ではないが日常生活の取引を行ふには足りる概略の釣合によりて、定めらるゝ旨を述べてをることは觀過すべからざる所である。斯くて労働によりて測定せらるべき眞實價格 Real price に對して、貨幣によりて比較測定せらるゝものゝを名目價格 Nominal price と稱えた。

貨物の價値をたゞ労働の一點に係らしむることの非なるは、その後屢々繰返された非難であり、特に所謂主觀價値説の出づるに及むで、全く反對の極端を力説するに至つた。スミスに於て各人は人生の必要、便宜、及び娛樂を樂み得る度合に應じて富み若くは貧しいと云ふ時に於ては、既に一つの推理の階段を踏越えてをる。必要、便宜乃至は娛樂と云ふとき、既にそは或る經濟的價値を有するものなることを豫想してはゐないか。空氣や水は以上の目的に役立つけれども、何人も其を所有する分量によりて貧富の別を立てない。或る貨物に對つて労働が向けらるゝ場合には、既にそこに労働を嚮導する何物かゞ存せねばならぬ。其は用ゐらるべき労働の以前に存在し、また費されたる労働の量には關係しない。而してそは人間の經濟的生活目的に役立つと云ふことでなければ

ばならぬ。若し勞働が價值を決する唯一の測度であるとすれば、其の以前に存する以上の目的に役立つ度合は何れも同一なりとするか。然らば或物に對して勞働を投ぜしめ、他の物に對して然かせしめざる根據を何れに求むべきであるか。マーシアルは價值の源因としての效用と費用とを缺の双刃に譬へ、二者共同に働きて價值を決定するものなりとした。經濟價值の源因として兩者固より必要であるが、然し若し兩者に輕重先後の序を立つべしとするならば、予は效用若くは效用の豫想を以て先きなりとなし、價值と一層緊密の關係ありとする。價值は費用なくして存し得れども、效用若くは其の豫想なくして存しない。費用は價值を生ぜしむることなくして費され得る。價值學說の根本に對して之以上私見を述ぶることは、今本稿の關する所ではない。唯スミスの價值說の關する限りに止めて、次の問題に移らねばならぬ。

生産に働くものとして、勞働の外に土地の所有と資本の蓄積とを考慮に入れ、貨物の價值がその生産に參與したる之等の三者に負ふものとして、所謂價值の構成部分を説くに及むで、スミスの所説は價值の理論より進みて價格の説明に進むで行く。而して勞働より得る所得たる勞銀、資本を所有する者がその使用によりて得べき利潤、(自ら使用せずして他人に貸與する者がその資本より得べき利子) 土地の所有者が其對價として受くる地代の三者を擧げたることは、例へ利潤と利子との區分尙ほ明晰を缺ぐの處ありとするも、分配理論の系統を明かにしたるものと稱すべきである。固より少數の貨物に就ては、其價格が全然勞銀のみより成るものあり、或は勞銀と利潤とより成るものも存すれども、通常凡ての貨物の價格は結局以上三者の中何れか、若くは其等の總てに歸着さるゝと

する。(同書五三頁)

而して價格を構成する其等の各部分は、其等が購ひ若くは支配し得る勞働の量によりて測定せらるゝものであつて、勞働は獨り勞働に歸せらるゝ價格中の其部分の價值のみならず、又地代及び利潤に歸せらるゝ部分の價值をも測定すと云ふ。(全書五二頁) 是れ勞働を以て凡ての價值の起因なりとする根本思想の現れと見るべきものである。(茲に用語の不正確なりと認めらるゝ一例が見らるゝ。「勞働は獨り價格中の勞働に歸せらるゝ部分の價值のみならず云々」となせること即ち是である。之は當然勞銀とせられねばならぬ。蓋し勞働そのものは價格の構成部分でもなければ、また分配上に於ける分け前でもないからである。)

以上の勞銀、利潤、及び地代には、スミスに據れば如何なる社會に於ても正常の平均的歩合がある。此歩合は一部は社會の貧富、進歩、停退の事情によりて異り、一部は勞銀及び利潤にありては各事業の性質、地代にありては土地の豊饒度によりて制御せられる。之等の平均的歩合を自然歩合 *Natural rate* と云ひ、貨物の價格が之を市場に齎すに必要なりし地代、勞銀、利潤の自然歩合に一致する時、之を自然價格 *Natural price* と稱ぶ。之に對して貨物が實際市場に於て賣買せらるゝ價格は市場價格と稱し、必しも前者と一致しない。(同書五七―八頁)

自然價格と市場價格と相枵格する理由は何れに存するか。市場價格は實際市場に齎されたる數量と、自然價格を支拂ふことを欲する人々即ち現實需要者の需要(之を現實需要と云ひ絶對的需要とは區別せられる)との關係によりて支配せられる。即ち貨物の數量がこの需要に不足する時は、需要者間に競争起りて市場價格は自然價格

を凌駕する。之に反してその數量超過する時は市場價格は自然價格より降る。而して數量と需要とが若し合致する時は兩價格も亦一致すと云ふ（同書五八一―九頁）即ち正統學派を通ずる思想たる、貨物の永久的平均價值はその生産費により、一時的價格は需要供給の關係によるとなせることは、スミスの中にも明かに示されてゐる。

然ながら自然歩合があり自然價格がありとするも、それは如何にして知らるゝか、又如何なる形式に於て現はるゝか。現實需要者は其れにて買はんと意思すると云ふも、既に捕捉し難きものなる以上、其等が需要者を導く標準たり得ざるや論を俟たない。需要者の購ふと否とを決定するものは、其等の外部的事情とは異り、需要者自らの心意の上に於ける貨物と貨幣の比較判斷である。スミスの茲に自然的と稱するは、放任すれば自づと斯くなるの意味に於て云へるにはあらず、又自づと斯くなるを欲する理想の意味をも含まない。たゞ單にスミスの考に據りては理論上は斯くして成立つと考らるゝ價格、即ち生産費を指示せるに外ならぬ。

市場價格を支配する條件として、スミスがグラスゴー大學の講義に於て、貨物の數量と需要との外に、需要者の貧富の度合を併せ擧げたることは、一層詳しく需要の側を觀ることゝなるべきが、之は貨物の對價として支拂ふ貨幣に對する評價如何の問題となり、主觀主義の或點と相通するに至る。スチュアートが貨幣數量説を極力排斥して貨物の價格は、貨物の數量、人々が其に對して爲す需要、需要者間の競争、需要者の能力の程度に從屬することを説き、貨物と欲望との相對的關係に歸せしめんとしたることゝ（J. Stewart, Works, II. pp. 271―2.）

スミスの説く所とは一致してをる。孰れも貨幣の側を離れて價格の理法は明にし得ると考ふるが如くなれども需要者の能力及び競争状態を考ふる限り、貨幣の側を無視したるの結果とはならない、蓋しそは貨物と貨幣との相對的較量を含むが故である。

固より市場價格と自然價格との開きは、無制限に生ずるものではなく相當の限度ありとしてをることは、恰も後の學者が價格の極限として論ずるところと其揆を一にする。即ち市場價格が久しきに亘りて自然價格を凌駕することあるは、其の貨物の生産が利益多きことを一般に知られざるが爲め、或は製造上に於ける技術の秘密、特殊の地質の不足等の原因に基く。價格の最高限をなすものは獨占品の價格であり、少數者に對する特權、競争を制限する立法の如きも亦獨占と類似の作用をする。之に反して市場價格が自然價格以下に下ることは稀である。蓋し價格構成部分の何れが自然歩合以下に降るとするも、その部分は生産より退いて貨物の數量を減ぜしむるに至るが故である。

需要供給の法則は古典學派學說の脊梁の一部を形作るものと考へらるゝが、それは限なき輪を辿る循環論法に陥るものである。價格が需要供給によりて決定せらるゝと共に、また需要供給は價格によりて決定せられる。故に孰れが原因にして孰れが結果なるかを斷ずることは不可能である。數學派の人々は此理を示すに、需要は價格の函數なりと説いた。此二つは一機制の部分の如く、何れの一も孤立しては變動しない。問題は其等の從屬の關係を明にするにある。生産費が價格を決定すと見ることに就ても同様であつて、此二つの間にも相互的從屬關係が

存する。原因結果の關係を一方的に決定せんよりは、之等の問題に於てはその相互の關係を明にするに満足しなければならぬ。

三

貨幣の根本的なる職能として古くより一般に認めらるゝものは、交換の媒介手段たること、價值測定の手段たることである。スミスに於ても此二つを認めたることは、貨幣の起源を物々交換に關聯せしめて考へたる所により、又貨幣を以て交換上名目價格を表すものなりとせる所によりて窺はれる。國富論に叙説せる順序よりすれば交換手段たることを先にし、價值測定たることを後にせるも、此内何れが本質的第一次的職能なるかは示されず。然るにグラスゴー大學の講義に於ては價值の測定及び交換の媒介としての貨幣なる一節を設け、先づ價值測定的作用に就て、多數貨物に就き頻繁なる交換を生ずる時は、その價值を測る共通の標準を必要とするに至り、金屬特に金銀が就中よく此目的を達することを述べてをる。而して金銀が價值の測定たるの結果として、また商業の要具たるに至るとする。(講義一八二―五頁) 此點より觀るときは、價值測定たることを以て第一次的となし、交換手段たることを以て第二次的のものとなせる如く斷ずるを得やう。

貨幣の職能の何なりやに就ては種々の説行はるれども、概觀すれば本質的なるものとしては以上の二職能を擧ぐるを出でない。交換媒介手段たることを力説する者に、ロツシアー、メンガー、ヘルフェリツヒ、リーフマン

等があり、價值測定たることを強調する者にはラフリンあり、ワグナーに至りては兩職能共に原始的なるものとす。之等兩者の主張に就ては、商學研究第二卷第一號所載の拙文に於て、貨幣成生の道行と併せ考ふるに當り論及し置きたれば、讀者参照の勞を吝まれずんば幸である。)

前者の主張を聞けば、貨幣を他の凡ての貨物より分つ所以は一般に交換に使用せらるる媒介手段たるにある、貨幣が一般的なる價值の測定として使用せらるゝ際にも、本來手段として働き、其の結果凡ての貨物は規則的に之と交換せらるべき事實より生じたる、一の結果なりとする。之に反して後者の主張する所は、交換が現實に行はるゝ以前に、如何なる割合にて交換さるゝかが決定せられねばならぬ、交換は其れに先行する問題として評價なる事實を必要とすと云ふ。兩者の説くところ共に一理を有するが如きも、私見を以てすれば兩者には先後の序位を立て得ない。價值の測定たりと云ふは、一般貨物の價值が其物の價值に引直され、引較べて云表さるゝことを意味する。交換を豫想せざる、又交換さるゝも可なることを豫想せざる單なる價值の表示と云ふことに、果して如何なる意義があるか。貨幣に就ては、他の度量衡器が物理的量を測定すると全く異なる關係にあることは、茲に其の理由を存する。然ながらまた交換手段たる場合には、同時に其れを以て價值を測定し得なければならぬ、價值が測定されずしては交換手段たり得ない。斯く見來つて予は之等兩者の間に、同時的共存的關係を認めんと欲するものである。

スミスに據れば、便宜上貨幣によりて貨物の交換價值は測定せらるれども、その眞實の測定となるものは勞働

である。或る貨物を自ら消費せんが爲めではなく、他の貨物と交換せんがために所有する人にとりての其貨物の價值は、其が所有者をして購ふことを得せしむる勞働の量に等しい。世界の有ゆる富が最初に購はれたのは、金銀に依りてではなくして勞働によつてであつた。然ながら二つの異なる勞働の量の間の割合を確立することは困難である。假令勞働の時間を等くすとも、忍ぶところの苦痛の度や精巧さも考へねばならぬ。加之各貨物は勞働以外の貨物と比較せられる方が屢次である。故に或る貨物の交換價值は其が購ふ勞働の量よりは、或る他の貨物の量を以て測るを一層通常とする。而して物々交換止みて貨幣が一般的なる交換手段となる時は、貨物は貨幣と交換せられる。従つて有ゆる貨物の交換價值は貨幣の量によりて測定せらるゝに至る。然し金銀と雖も他の貨物と同様にその價值を變ずる。自らその價值を變ずるものは、他の貨物の正確なる測度たり得ない。たゞ勞働の等量に至りては、凡ての時及場所に於て勞働者に對し等價值のものと云ひ得る。故に勞働のみが其の價值を變へず、總ての貨物の價值を比較測定すべき眞實究極の標準である。其は貨物の眞實價格であり、貨幣はたゞその名目價格であるとする。(國富論第一卷三二―五頁)

是に由りて觀れば、貨幣が價值の測度たりと云ふは、約束的のものであり單に假用せらるゝ方便に過ぎないとするのであつて、究極不動の標準たるものは勞働なりとするがスミスの主張である。之は價值の起因は勞働なりとすることより派生する一つの系論と考へらるべく、共にスミスの勞働價值説の中心思想をなすものと觀らるゝ。勞働を以てする價值の測定に困難があり、金銀を以てする測定に不正確が伴ふとすると、自づから第三の貨物

がその目的の爲めに考量せられる。スミスに據れば金銀貨幣の價值は二方面からの變動を被むる。即ち一は時の異なるにより同一稱呼の貨幣中に包含せらるゝ金銀量の異なるにより、二は時の異なるにより同一金銀量の價值を異にするによる。古來國王がその財政の窮乏に處するが爲めに、貨幣を惡鑄したることは英國を初め屢々見たる實例であつたと同時に、米國鑛山の發見以後歐洲に於ける金銀價の漸落したる事實も、既に顯著なるところであつた。之等の事實に鑑みてスミスは、地代は貨幣によりて受入れらるゝよりも、穀物によるを以て一層不變なるものとして考へ、金銀其他の貨物よりは、勞働者の生活手段たる穀物の等量を以てする方、異なる時に於て等量の勞働を購ふであらうとした。從て穀物は他の如何なる貨物若くは貨物の組合せよりも、等量の勞働を一層よく代表し、一層正確なる價值の測定であるとした。(同書三五—八、一八七頁)是れスミスを以て、理想的支拂の標準として穀物本位制を提唱したるものとなさるゝ根據である。

然し以上述ぶる所によりても窺ひ得るが如く、終極の標準としては勞働を認め、勞働を測定する手段として金銀よりは穀物の方勝れるを主張したるものであつて、金銀を捨てゝ貨幣として穀物を使用すべしとの主張を貫かんとしたりと云ふを得ない。その事は又穀物地代が久きに亘りてはとに角として、年々に就て見れば却て遙に變動的なることを認容し、結局は勞働が總ての時及び處に於て、種々なる貨物の價值を比較し得る唯一の正確なる價值測定たること明かなるを述べ、日常の取引に於ては金銀貨幣を以て足ることを説けるに徴しても知られる。

假令當時の事情に於て、穀物の價格比較的不變なりし事情があつたとしても、單一なる貨物を以て理想的支拂

の標準を立て得べしとする見解には、實は多大の缺點が含まれてをる。如何なる貨物も人間の生活に對する意義は常に同一であり得ず、從つて其の價値は變動せざるを得ない。加之、生産技術、交通の進歩、其の時々の需要供給の變化等は、絶えず貨物の價格を動搖せしむべく、決して想像せらるゝが如く理想的不動の標準たり得ざるものである。然れば之に鑑みて數種の貨物を組合せ其の價格の綜合により、特に物價指數表に基き、之を標準として支拂決済せしむべきものなりとの提案をも生ずるに至つた。綜合貨物本位又は物價指數本位等の名を得たるものは是れである。然ながら之とても完全なる本位制度たり得ざるは論なく、各種貨物の人間生活上に於ける意義は社會の變遷によりて異なるべく、又支拂の標準となし得る程に精確なる物價指數の作成し難き事情の下に於ては所詮不公平を齎さざるを得ない。如何なる標準を以てすとも到底完全なる公平は實現すべからず、たゞ比較的優れたるに満足すべきのみ。

四

貨幣を以て貨物の一種に外ならずと觀る立場にあるとき、貨幣の價値に就ても一般貨物と殊更に異なる見解を生ずることなきは、深く訝むに足らざる所である。スミスに於ても然うであつて、之に關して説く所は甚だ乏しい。貨幣が經濟上に占むる特殊なる地位に基いて生ずる價値、貨物の價格と關聯せしめて觀たる貨幣の價値等に就ては、叙ぶる所がない。貨幣としての特殊なる地位に基き、素材の側よりする以外にその價値を論ずることは、今

日に於ては金屬主義以外の種々なる貨幣學說の試むる所であるのみならず、實はスミス以前にロツクによつて說かれてをることを見出す。即ち國民の一般的合意は銀に對して、其の性質が交換の目的に適するの故を以て想像的價值 Imaginary value を賦與したと述べたるが如きは是れである。こは固より簡單ではあるけれども、金屬も貨幣として用ゐらるゝ場合、その特殊の用法に基いて特殊の價值を認めらるゝとするは明かである。而して此事はスミスの上に影響を及したるの跡を見出し能はぬ。

貨幣の價值に關して特殊の觀方を取らざるスミスに於ては、貨物に關して云ふ所は金銀に就て云ひ得べく、金銀に關して叙ぶる所は同時に貨幣に當徹めらるべきものでなければならぬ。而して金銀に就ては其價值が變動することを説いて、金銀の或分量が購ひ得る勞働の量、若くは其が交換せらるゝ他の貨物の量は、常に斯かる交換のなさるゝ時に知られたる鑛山の豐饒度に從屬する。米國の豊富なる鑛山の發見は、十六世紀歐洲に於ける金銀の價值を従前の約三分の一に減じた。鑛山より市場にその金屬を持來すにより少き勞働を要するが故に、市場に持來されたる時により少き勞働を購ひ得るなりとする。即ち豊富なる鑛山の發見によりて金銀の價格下落したるは、生産に要する勞働の量を減じ得るに至れるが故とする。たゞ然し金銀にありては、過剰なる場所より不足せる場所に輸送することの容易なるがため、他の貨物の如く連續的に其の價格は變動せず、其變動は一般に緩漫、漸次、均齊であるとして、他の貨物の價格と趣を異にする點を擧げてをる。(國富論第一卷三四、三一—二、四〇—三頁)然ながらそれは依然貨物の一種としてとあつて、貨幣としての特殊なる性質を引出したるものとは云ひ得ない。

社會に存する貨幣の量と貨物の量とを對立せしめ、その相對的關係によりて貨幣の價值は定まると見ることはスミスの當時に於て既に有力なる主張であつた。其一として試みにモンテスキューを擧げやう。曰く、貨幣は貨物の價格なるが如何にして此價格は決定せらるゝか、換言すれば貨幣の如何なる價格によりて各貨物は代表せらるゝか。若し全世界に於ける金銀の量を貨物の量と比較するならば、有ゆる特殊の貨物は金銀全量の或る部分と比較することを得る。一方の全部は他方の全部なるが如く、一方の部分は他方の部分であるであらう。人類間の貨物は總て一時に取引せらるゝものでもなく、その表徵たる金屬即ち貨幣も總て一時に取引せらるゝものにあらざるが故に、價格は貨物全體の表徵全體との複合的割合、及び取引せらるゝ貨物全體と取引せらるゝ表徵全體との複合的割合によりて決せられる。而して今日取引せられざる貨物も表徵も明日は取引に入り來るや知られざるが故に、價格の決定は根本的には常に貨物全體の表徵全體に對する割合に係ると。(Espin des lois, iv. xxii. c. vii.)

(三) 氏の此見解はロツクによりて既に早く述べられたりとする者あれど、予の知る限に於てはヒュームの論文の中には、明確に同様の説が擧げられてをる。凡ての物の價格は貨物貨幣間の割合に係ること、又孰れの側に於ける著しい變化も價格を上下する結果を有つことは、殆ど自明の公理のやうに見ゆる。貨物を増加すれば廉くなる、貨幣を増加すれば貨物の價值は上る。之に反して兩者の減少は反對の傾向を有つ。價格が市場に來または來得る貨物の量及び流通する貨幣の量に多く關係して、國民中に存する貨物及び貨幣の絕對量に從屬せざること亦明かであると述べてをる。(Essays, Vol. I. Of Money.)

而して同様の見解が必ずしも當時の學說たるに止まらず、ジムメルに於ても繰返へされてをることは、甚だ興味多しとしなければならぬ。即ちジムメルは貨幣が經濟價值を測定する關係を説明して次の如く云ふ。我等は貨物の全存在量と貨幣の全存在量との概念、及び之等兩者の從屬關係の概念を作る。今各個々の貨物は利用し得べき貨物總量の特定の一部分である。貨物總量を a とするならば、個々の貨物は 1_m^a である。其價格は其の貨幣總量に對應する部分であつて、貨幣總量を b とするならば同様に 1_m^b である。我等若し a 、 b の大きさを知り、而して特定の對象が取引せらるゝ全體の如何程に當るかを知るときは、其の貨幣價格を知ることが得る。貨幣と各有價值の對象とが一の質的一様性を有するや否や、貨幣が自ら一の價值なりや否やとは全く離れて、特定の貨幣額は對象の價值を決定し測定することを得ると。(Simmel, Philosophie des Geldes, S. 104.)

此種の見解は先づ貨物總量と貨幣總量とは自然に、必然に、交換され得べき状態に於て相對立することを前提とするけれども、之等の量は何れも、我等の眼からは匿されてをる。兩者の對立關係は、一旦交換として實現せられし價值關係を外にしては考へ得られざるものであつて、恰もフイツシアアの交換方程式の思想もその根底に於て相通ずる。結果されたる交換過程から我等は貨幣の特定量と貨物の特定量との對立を見、回顧的溯及的に兩者の價值關係を知り得るのみである。一定の貨幣量が個々の貨物の價值を測定し得るは、二量間の對立比較の關係に基くとすは、自ら一方が他方を以て測定され能ふことを前提するものである。然しながら唯單なる二量の對立のみを以てしては、其の間より價值測定を可能ならしむる何物も生れて來ない。斯くせらるゝが爲めには結

局二量が何れか一つの事柄に結付けられねばならぬ。我等が時間をば一の運動過程を媒介とし、空間的關係によりて測定し得ると云ふは、其の運動が本質上等しく時、空の兩範疇に屬するからである。

スミスの當時相當に有力なるものとして考えられたるべき斯の說に、彼が如何なる批判的意見を有したりしや不幸にして知る術を有たぬ。此見解は必然に最も明白なる貨幣數量說を導き出すべきであるが、スミスが貨幣數量說に對して寧ろ否定的態度を示し、結果に於ては却つて曖昧なる立場に陥れることは、之と併せ考えて興味ありとせざるを得ぬ。スミスに於ては金銀の價格從て貨幣の價格を決定するものは、同じくその生産に要する若くは其が購ふ勞働の量である。社會の必要とする分量以上の金銀貨幣は、而して又紙幣の發行せられし場合に於ては、其れによりて代用せられたる部分の貨幣量は流通外に、或は外國に流出すとなし、又金銀の價值と他種の貨物の價值との割合は、常に流通する紙幣の性質若くは量によらずして、金銀を供給する鑛山の豐饒の度による。其は金銀の或分量を市場に持來すに要する勞働の量と、他の貨物の或分量を持來すに要する勞働の量との割合に従屬するとなすが如き、明かに貨幣數量說に對つて放てる攻撃である。

固より貨幣の數量が必然的自働的に其量に應じて價格を支配すと云ふのみにては、未だ貨幣數量說を基礎付ける所以とはならぬ。それが事實より導かれたる歸納的定理なりとするには、未だ事實の上の反對や障礙があり、貨幣の數量と價格と全く無關係に立つとするは、事實を無視する者であり、何れも交換過程に對する深き考察を怠るものである。惟ふに貨幣數量の増加は必然にその特定量に對してより低き評價をなさしめ、全量に對する部分

量の意義を減少せしめる。其の結果は特定の貨物と比較して考量の上に描くとき、貨幣量により少き評價をなさしめ、特定の貨物に對してより多き貨幣量を對立せしむることを厭はしめない。即ち之は價格の騰貴となりて現はるゝ事實である。貨幣數量減少の場合も亦此の反對に論ずることを得る。此意味に於て貨幣の數量は、例へ影響の程度は明にし難しとするも、とにかく價格を一定の方向に變動せしむる力を有する。然ながら又貨幣數量説は需要供給説と不可離の關係に立つものなるが故に、スミスの如く市場價格に就て需要供給の關係を肯定することは、推して貨幣の數量に就ても需要供給の關係を通して、價格に作用すとなすの結論に到達せしめざるを得ない。ロツクより降つてロー、モンテスキュー、ハリス、ヒュームに至る迄數量説の支持者多きが中に之に反對し、事實に於て鋭き考察を缺ぐの結果に陥れることを悲まざるを得ない。

次に素材を異にする二種以上の貨幣相並びて流通する場合、兩者の關係は何うなるか。斯かる場合に於ては事實上、各種貨幣間の交換比率を法を以て定むるを便とし、また然かするを通例とし來つた。此場合若し貨幣に對する法制確立し、一般にその流通に對する信認の存するときは、各種の貨幣は素材の價格に拘らず、相並びて故障なく其割合を以て流通するであらう。然らざる時は比率を定むる法の有無に拘らず、各種の貨幣は素材金屬の價格の變動に従ひ、異りたる割合を以て流通せざるを得ない。スミスが法定せられたる比率の繼續する限り、其内最も貴き金屬が事實上全貨幣の價值を支配することゝなると云へるに就ては、(國富論第一卷四三頁)何等の理由をも示さない。然しこの事に就ては、有ゆる貨物の中にて金屬が、また金屬中貴金屬が貨幣材料として使用せ

られたる一般的事實に省み、又其の場合に考及ばるゝ理由に基きて、スミスの云ふ如き傾向の存することは肯ひ得る。

諸侯政府等の財用に充つるが爲めに貨幣を改鑄し、その内容を減ずることは、古來何れの國を問はず屢々行はれたところであつた。而して其弊害を認めて其が結局は諸侯政府の歳入を減じ、債權者を傷け債務者を益して貨幣關係を混亂せしめ、商業取引を停頓せしむることを指摘するは、心ある論者の常に遺れざる所であつた。スミスも亦その事を述べてをる。(國富論二九頁、講義一八八頁)貨物貨幣説を取り素材と貨幣の價値とを引離して考ふべからずとする説に於て、斯種の論結を生むは當然であるが、クナツプ、リーフマン等の所説より推進めば素材内容の増減は其流通上の價値に影響を及ぼさざる結果とならざるを得ない。惟ふに内容を離れ素材を離れて貨幣が其價値を有ち、流通を確保せらるゝが爲めには、流通に對する一般の信認の確立せらるゝことを絶對の必要條件とする。此の信認の確立せらるゝ限度に於て、範圍内に於て、貨幣の價値はその素材を離れて存立し得る。素材を度外して流通上の社會的信認を考へ得ざる限り、内容の増減が貨幣の價値を左右するとすは蓋し其所であつて、スミスの斯の點に關する見解も亦貨物貨幣説の産む所であり、素材を離れて特殊の職能を盡すものとしての貨幣に想到せざる當然の結果である。

五

紙幣に關するスマイスの見解は貨幣の作用に就ての考察につゞく可きものである。スマイスに據れば貨幣は社會の流動資本の一種なれども、社會の所得に關聯せしめて考ふる限に於ては、固定資本に酷似すと云ふ。その理由とする所は、一、機械を設け之を維持するに或費用を要するが如く、貨幣も交換の用具にして之を獲得し維持するに費用を要する。其等の費用は社會の總所得中の一部分を占むべきが故に、純所得には控除されねばならぬ。二、機械其他の交換用具の如く貨幣も貨物それ自らとは異り、社會の所得は貨物より成りて之を流通せしむる用具に存しない。三、貨幣の獲得維持に要する費用の節約は、機械設備の獲得維持に於ける費用の節約と同視すべきものなりと云ふ。(國富論第一卷二七—二五頁) この意味に於て費用多くまた不便なる金屬貨幣に代へての紙幣の使用は費用の節約であり、勞働の生産力を減せずして社會の流動資本の量を増加し、産業を活潑にすと見らるゝ。而してまた茲に紙幣の效用が理解されてをる。

紙幣の名の下に包括的に呼ばるゝものゝ中にも、種別あるは云ふを俟たざるも、その中最も重要であり又最も其の目的に適するものは銀行券であり、スマイスの紙幣に關して説く所も其に限られてをる。銀行券は若しその發行者に對する信用が確立され、要求次第金屬貨幣に引換えらるべきことの豫想せらるゝ限り、何等一般貨幣と異なる所はない。故に一國の必要とする貨幣額以上に、一定の兌換準備を具へて銀行券が發行せらるゝ時は、貨物の分量の増加を豫想せざる限り、其れだけの貨幣を必要としない。従て此場合社會の必要とするだけの貨幣が國內に残り、超過せる部分は外國に流出して有利に利用せられる。而して其は金銀貨幣に限られ紙幣は殘留する。そ

は蓋し紙幣は外國にて流通せざるが故である。斯くして貨幣流通總額の若干部分に相當する金銀を準備し、紙幣を發行することによりて一切の貨幣の需要に應ずるとせば、其れだけ金銀貨幣を節約し之を或は消費貨物の購入に、或は生産手段の購入に使用するを得せしめて、其國の産業に必要な資本を増加せしめ生産を増進することとなる。銀行の大なる效績もこゝに在りとせられる。(同書二七六―九頁)

紙幣の效用を説き其の金屬貨幣に劣らざる所以を擧ぐるは可なり、然ながら紙幣の發行は常に同額の金屬貨幣を流通外に送る所以となるか。一國の必要とする貨幣の量は常に受働的に定まるものなるか。換言すれば貨幣の量は常に受働的に他の原因によつて定まるものであつて、逆に其が他の條件を動かす原因とはならざるものであるか。之は固より一方的に斷言し難い所である。増加せられたる量が働因となつて他の事情を支配し、増加せられたる量を流通上に止むる結果を來さずとは何故に斷じ得る。必要量を假定し其を超えたる部分が當然に、而かも金銀貨幣の形に於て外國に流出するとなすは一のドグマである。

銀行が紙幣を發行するは主として手形割引の方法に依れども、當時蘇格蘭の銀行はまた當座勘定の制度 *System of cash accounts* を創めた。之は保證人を立てしめ擔保を徴して一定額を限り貸出を許すものであつて、紙幣の發行とその作用に於て異らない。然ながら銀行券の量をしてよく一國の必要とする貨幣量を超過せしめざるが爲めには、銀行は眞實の債權者より眞實の債務者に宛て振出し、從て期日に至り相違なく支拂はるべき性質の手形割引に限定すべきである。當座勘定に就ても貸出さるゝ額と拂戻さるゝ額とが、大體に於て平衡を得べきこと

に注意を拂はねばならぬとなし、實際取引に基かざる融通手形の弊を説いてをる。(同書二八七―八頁)斯種の意見は今日に於ても尙ほ一般に抱懐せらるゝ所なるが、凡そ企業者の必要とする資金は、常に既に有する資本の回轉を速かならしむる爲めに要せらるゝのみならず、又従來の事業を擴張し若くは新事業を創始する爲めに要せらるゝこと少くない。而して之が爲めには以上の拘束を放れたる手形割引及び貸出によるを必要とする。固より其等が危険の要素をより多く有することは事實であるけれども、要は其々の内容に従つて判断せらるべきものであつて、無條件にたゞ其名に拘つて決せらるべき問題ではない。

紙幣の流通は之を二つに別つことを得る。一は商人相互間の流通であつて他は商人消費者間の流通である。而して商人間の取引は巨額にして巨額の貨幣を必要とし、商人消費者間の取引は少額であり、少額の貨幣は巨額のものよりは遙に速に流通する。全消費者の一年の購入額は其故に全商人の其と少くとも總額に於て相等しとするも、遙に少額の貨幣を以て取引を行ふことを得る。故に紙幣はその額面を適宜に按配することによりて、其の流通の範圍を定むることを得る。銀行券は其額面を限定して(五磅以上)流通を商人間に限るべきものなりとする。(同書三〇五―六頁)

其理由とする所は、小額の銀行券はさしてその確實性を考ふることなく流通さるべく、小資本家をして銀行を設立する機會を與へ、其破綻は累を一般社會に及ぼす。又紙幣の流通が商人間に限らるゝ時は金銀貨を豊富に維持することを得れども、小額の紙幣一般に流布するに至らば取つて總て金銀貨に代るであらう、と案するに因る。

銀行に對する斯種の制限も自由の束縛たるべきは云ふ迄もないが、少數の個人に自由を許すことに由つて、一般社會の安全を脅すべきではないこと論を俟たぬ。スミスは之を延焼を防止すべき防火壁の建設に例へてをる。自由の制限がスミスにとりては常に何等かの理由を求むべき事柄なるは、其一般的自由主義の立場に想到して首肯せらるゝ所である。自由の拘束必ずしも難ぜらるべきではなく、問題となるは其理由にある。上述の如き見解は一般に信ぜられて來たところであり、且つ諸國の實際に於て現今に至る迄事實に行はれ來つた所である。金銀貨幣を流通より排除することの必然に避くべきものなるの理由は、たゞ其れ自らの内には見出し得ない。小額銀行券の發行その事が不確實なる小銀行の設立を誘發するの理由ともならない。たゞ國家が造幣至高權を維持し貨幣流通を統整せんと欲する限に於て、小額銀行券の發行を阻止すべきことに理由がある。商人間の取引に於ては巨額の貨幣を必要とし、商人消費者間に於ては少額にて足るとなせるは、今日の實際に於ては通ぜざる事柄であり却つて反對の事實を認むべく、リーフマンの如き貨幣本質觀を導出すの理由となつてをる。

紙幣の増加が一般通貨の價値を減ぜしめ、必然に貨物の價格を騰貴せしむるとなす一般の見解に對しては、スミスは紙幣の流通によりて金銀貨幣を排除する量は、其紙幣の量と等しかるべきが故に全體より觀て通貨は増加せず、確實なる銀行により呈示次第金銀に換へらるべき紙幣の價値は全く金銀と同一なるべく、たゞ兌換の無條件、確實ならざるものに於てのみ、金銀貨幣の價値より下落すべしとしてをる。(同書三〇七—八頁)之は一國の必要とする貨幣量は定つてをり、紙幣の發行はたゞ其れだけの量に於て金銀貨幣を排除すとす前提の上に立つ

ものである。即ち其根本に於て貨幣の量は能動的に他の諸條件を左右する力なしとする考に立脚する。排除されたる金銀貨幣量と新に加はる紙幣量とが、常に相等しとの理由は存しない。若し紙幣の發行によりて貨幣量の増加を惹起する限に於ては、其が貨幣の價値に影響すべきこと論を俟たない。

貨幣を以て手段に過ぎずと見るスマスに於て、尙ほ金屬主義より脱却する能はず、銀行券を以て金銀貨幣の代用品に外ならずとする見解の存することは、貨幣の名目性の十分に理解されざりし事情の下に於て、蓋し已むを得ざる所であつたらう。

六

貨幣の本質に關するスマスの見解は、貨幣の作用より轉じて紙幣を説く所と、マーカントイルシステムの原則を説く所とに於て特によく窺ひ得らるゝ。前者に就ては既に前節に述べたる所により知らるべきが故に、茲には専らマーカントイルズムの思想に關聯しての、スマスの貨幣本質觀を考へることとする。

富は貨幣即ち金銀より成るとなし、貨幣と富とは有ゆる點に於て同義語なりとすることは、スマス以前所謂マーカントイルズムの思想世を擧げて旺なりし當時信ぜられた所であつた。この思想に基いて鑛山を有せざる諸國は貿易差額によつてのみ金銀を輸入することを得るとなし、其結果内國消費用外國貨物の輸入を抑制し、内國産物の輸出を促進することが國民經濟の主要目的であり、従つて國を富ます二大方策は輸入の制限と輸出の奨励であ

るとして、種々なる干渉政策が行はれた。此思想の根本的誤謬を排撃することは國富論の全體を通じて見らるゝ所であり、又此著の出された直接主要の動機であつた。

貨幣が唯一の特に優れたる富にあらざることと立證すれば、マーカンテイリズムの全體系は覆らざるを得ぬ。國民の眞の富は金銀より成るにあらざして、其土地、家屋及びび有ゆる種類の消費貨物より成るとする見解や、國民の所得は事實上貨幣であり得べく、又貨幣を以て支拂はるれども、其の實際の富、實際の所得は貨幣を以て購ひ得る消費貨物の分量に比例するとなす見解を、スミスは種々の點に關連して述べてをる（全上四一五—一六、二七—四頁等参照）實際世間の事實として貨幣は他の貨物よりも尊重せらるゝこと多く、貨物を買ふことは賣るよりも容易なるは、富が貨幣より成るが故ならざるは云ふ迄もなく、交換手段として貨幣の有つ特質により、其が最も一般的なる經濟的價値を保持して如何なる經濟的目的にも役立ち得る手段たるが故である。

スミスにとりては貨幣は單に交換の手段なりとせらるゝ。貨幣は大なる流通の車輪である、其は資本の重要な一部を成すけれども社會の所得の一部を成さない。流通の車輪なることは其に依りて流通せらるゝ貨物とは異なる。社會の所得は其等の貨物より成り、其等を流通する車輪より成立しない。流動資本として工業を動すに必要なるものは原料と道具と勞銀である、勞銀は通常貨幣を以て支拂はるれども、その眞實の所得は貨幣に存せずして貨幣の値に存する。金屬片に存せずして其に依て得らるゝものに存する。従つて又貨幣が缺乏すれば多大の不便は伴へども、物々交換が其を補ふであらう。信用による賣買、相互の貸借を補償決濟することが、少許の不便

を以て其を補ふであらうとする見解の生ずるのも當然である（全上二七五、二七二―三、二七八―九、四〇三頁）
同様の見解はグラスゴー大學の講義の中にも明かに見出される。

貨幣を以て經濟的目的に對する單なる手段と見ることは誠に當を得たる見解である。而も尙ほ之を金銀貨幣に限定し紙幣を以てその代用物に外ならずとすることは、當時に於て踰越し難く離脱し難き制縛であつたとしても徹底を缺ぐの憾は即ち免れない。貨幣の成立を辿つて其當時迄に至り既に存した状態の下に貨幣の本質を考へたるとき、自然スミスの抱懷したる如き考へが起きたであらう。之は金屬主義の頂點に立つと考へらるゝマーカンテイリズムに較ぶれば、著しい進歩であることは云ふ迄もない。然し若し貨幣の經濟社會に於て爲すべき作用を考へ、觀點を回顧より豫想に向けてその流通手段たるの本質に徹したならば、素材たる金屬から放たれたる見解に到達し得べきであつた。

社會現象に關する學説は其の時代を背景として觀るに於て、その意義と興味とを加ふべきと共に、貨幣理論も當時の經濟事情特に貨幣現象より大なる影響を受けて生れる。クナップ、リーフマンの新説もかゝる事情に育まれて出來てきた。スミスの當時に於て貨幣として最多く流通したるものは金屬貨幣であり、銀行券は金銀貨幣との兌換を期待することによりて、其の代用物として流通したであらう。然し若し貨幣を發生的に眺めて現在に到るに満足せず、又舊來の事實に泥むことなく、職能に顧みて其の本質に想到れば、稍趣を異にする理論を生み得たであら

う。スミス以前既に其の傾向を帶ぶる學說も少からざるに、その意味に於ての影響を受けたる跡ありとは考へ能はぬ。否單にそれには止まらず、當時和蘭は強大の商業國であつた。其の取る所の一般經濟政策はよく諸外國の範となつた所であつて、アムステルダム銀行に行はれたる所謂銀行貨幣の制度の如きは、スミスも之を明かにしてをる。若し其の流通の本義に徹したらんには、遂に抽象化されたる貨幣觀に到達したるべきは疑ひ能はぬ。惟ふに國富論の一書こそは、當時一般に信ぜられたるマーカンテイリズムの思想を駁撃し、世の妄想を打破するを以て第一義としたるべきは、其書に題して諸國民の富の性質及び成因に關する研究となせるに徴しても、其の眞意を察することを得る。貨幣を以て貨物の一種と觀つゝも、尙ほそれ自らが富にあらず、富を流通する手段に外ならずと觀ることの理由は茲に尋ね得る。金屬主義の極致を脱すること一步にして、また其の埒内に踏止まること
が即ちスミスの立場であり、彼の貨幣理論の特徴は茲に萌すと觀らるべきである（大正一一、五、一、）

高 垣 寅 次 郎